

KJ法のステップにおける隘路についての考察

～インタビューにおける単位化～

永野 篤

(キャリア開発総合学科)

I. 研究の背景と論点

KJ法は川喜田二郎（1920-2009）が、フィールドワーク研究において編み出したモノグラフ生成における思想と手順である [永野 2020: 21-20]。地理学、あるいは文化人類学的切り口における異文化あるいは未知の分野の調査のまとめにおいて、試行錯誤の末、生み出されたメソッドである。川喜田はプライベートでのアイデアだしをする際の方法としても簡易的に日常でも使っていた。そのような日常的使用と本来であれば注意深く行うべき研究方法との区別が曖昧な状態で、一般に公開され、受容されてしまった [永野 2019]。更に企業における集合研修などでの多数の人々の意見を集約するための技法として採用され、小学校の授業、ワークショップなどにも導入されていくようになった [永野 2017:91-92]。近年では、質的研究におけるメソッドとして、複数から収集したデータのまとめや、半構造化インタビューで収集した長文の逐語録などをまとめる際にも利用されている [永野 2021]。しかし、そのような用途におけるKJ法の使用方法について川喜田が説明を行った記録が見当たらない（註1）。つまり、研究者は、具体的にどのようにKJ法を使ったらよいのか、よくわからない状態で取り組むケースが想定される。

研究者は大学や大学院で、質的研究法についても学ぶ機会があり、GTAやその派生的な様々なメソッドに触れ、KJ法もそれに類

する手法として紹介されることもあろうかと思われる。先行研究などを参照し自身の要望に合うスタイルとしてKJ法が選択されることもある。しかし研究の結果はあっても、具体的なプロセスは示されず、実務的には躓くことがあると考えられる。本論ではこうしたことを踏まえ、インタビューあるいはナラティブとも称される研究（註2）におけるKJ法の活用の在り方について、その手続きの最初の段階である「単位化」（註3）に焦点を置き説明を試みるものである。なお、インタビューが終了し逐語録を作成した後、KJ法の手続きとして、ラベルづくり（単位化のこと）、グループ編成、図解化、叙述化という4つのステップがある（図1）。

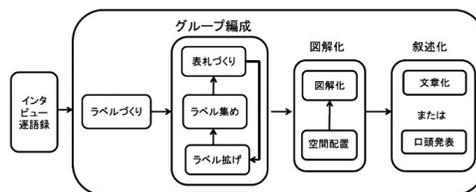


図1 KJ法のステップ（註4）

II. フィールドワークとインタビューの違い

川喜田が想定している文化人類学的アプローチと、インタビューのまとめの違いについては共に「研究」と呼べるものではあるが、性質は異なる。以下、詳細を述べる。

II-1. 野外での現象とデータ化された逐語録

川喜田の調査においては、簡易的なメモをとり、できればその日のうちにある程度まとめ、更にひとつの出来事は一枚のデータカードに文章や絵を収める。分量が多い場合には一枚でなくてもよい。そこに、いつ（時）、どこで（場所）、誰から（研究者自身の叙述か他者からの情報か）（出所）、そして、カードの記録者名（作成者）の4項目を掲載する。更に、文化人類学の分類項目 HRAF (Human Relations Area Files) の番号を載せ（註5）、記載内容が自身にとって一目でわかるよう「一行見出し」をつけておく。収集されたデータは分類記号によって整理しておくが、それだけでは、分類毎のまとめになっているだけで研究にはならない。そこで、「一行見出し」を机や畳の上にならべ、分類記号を無視し、同じように「感じられる」ものを集め、それらに新たに「表札」と呼ばれる別の名称を付ける。表札は、階層化され、最終的には10束以内にまとめ、それらの関係について論理的に説明（このプロセスが叙述化である）をしていくと、仮説が生成されるというものである [川喜田 1967, 1986 等]。

川喜田が取材を行っている時点で見聞されたことは、データカード化の過程で概ね脈絡のある「ひとつずつ」の事象として整理されていく。例えば、何事かをめぐって優先順位を決める日本でよく行われている日常的で簡易的な方法は、日本語ならじゃんけんと名前がついているが、当該文化圏外の人間には名称はわからない。それを「じゃんけん」とは単純化はせず、その一連の行為について叙述をするわけである。その際、川喜田は人間行動における7つ着眼点（類型、状況、主体、対象、手段・方法、目的、結果）を念頭においている。また、川喜田は単位化は相対的な

もので基準はない、とも説明している。長い文章単位でも、単語レベルでも、要は、用途次第だからである [川喜田 1967:38-39, 142-145]。この見解をそのまま受容し実行しても、少なくとも筆者の経験上問題はない。

しかし、川喜田は、インタビューのように長い文章が続く場合の単位化については、説明をしていない。誰かが話をしている際の聞き取りにおける一行見出し書き方については「記録係は、自分にだけわかる表現でメモを記せばよい」「意味のエッセンスをつくる場合に（略）過度に抽象化しすぎない（略）むしろ、できるだけやわらかい表現で、発言者のいわんとした要点のエッセンスを書きとめるのがよいのである」としている。具体的には「飲酒効果の是認的発言」とするのではなく「酒は飲むべし」を良しとしている [川喜田 1967:72-73]。こうしたアプローチで、インタビューにおける区切りをつけ、端的にまとめる（単位化）ことができるかといえば実際は難しい。質的研究を志向し、わざわざ1時間のインタビューをしているような場合には、調査対象のメカニズムが不明であり「要点のエッセンス」が何であるかを研究者自身も知らないからである。要点のエッセンスは全体像が明らかになり、構造化の中で要素の影響の度合いが精査され、相対的に仮説的に発見されていくことになる。

II-2. データの出所の違い

川喜田のフィールドワーク研究とインタビュー処理で大きく異なることがある。前者は、川喜田は自身が行き、取材したことについての事象である。後者は、研究者自身が体験したことではない事象について明らかにしていくことになる。川喜田は4項目の注記が的確になされているならば、データを見ればその時の状況がありありと蘇ってき

て、香や色が感じられ、共同研究者たちとも共有できるとしている [川喜田 1967:37]。しかし他者のインタビュー逐語録から同様の理解をすることは、研究者の“想像力”によるところが大きくなるであろう (註 6)。この課題を解決するには「ラベルづくり」の次のステップである「グループ編成」における「表札づくり」で求められるスキルが必要になる (註 7) が、他所でも論じられており [永野 2020] 本論では割愛する。

以上を整理すると、川喜田のフィールドワークでは野外での出来事は取材の初期段階からカードという小さな単位になっており、それを紡いでひとつにしていく。一方インタビュー逐語録は初めからひとつづきのものになっており、それを細分化し再構成するという順番になっている。川喜田は現場にいる取材者であるため周りの状況を体験者としてよくわかっている。しかし、インタビューの場合には研究者は当事者ではないため、インタビューイが語っている周囲の環境や状況については、よくわかってはいないことが多い (表 1)。このことから、川喜田が語る KJ 法の手続きをそのままインタビュー逐語録に適用してもよいのか、あるいは何らかの工夫が必要になるかは整理されてしかるべきと考えられる。

Ⅲ. オルタナティブとしての具体的対応

単位化の工程は二つに分かれる。一つ目はどこに区切りを入れるかであり、二つ目はどのようにそれを圧縮するかである。区切る方法の第一段階は HRAF に倣い分類的な基準で区切り、それができない場合には脈略ある話が終わったポイントで区切る。第二段階は、圧縮化することである (ラベルづくり)。この圧縮というプロセスは「グループ編成」における「表札づくり」の技術と関係している。表札づくりは KJ 法のプロセスの中で最も難しいとされている [川喜田 1986:128]。したがって安易に圧縮 (あるいは要約) することは、研究解明に役立つかもしれない有益な内容を捨象してしまうことになるかもしれない。したがって、本論では無理に圧縮することを奨めない。以下、詳しく述べる。

Ⅲ-1. 内容の分類整理 [QA] モデルから [SR] モデルへ

インタビューを研究対象とした単位化の前段階である区切りの方法として、川喜田ならびに HRAF の分類手法に倣うことを筆者は提案する。川喜田は、見聞した事象を一つにまとめ、それに HRAF の分類記号をつけている。彼は見聞した内容を一枚のデータカードにまとめ分類記号をつけたが、HRAF 自体はエスノグラフィー上の記述の中で、分類に当てはまる部分を指摘し、そこに記号を加え、特定研究分野ごとに整理していったもの

表 1. 川喜田の KJ 法 (フィールドワーク) とインタビュー逐語録の違い

	川喜田の KJ 法	インタビュー逐語録
質の違い	野外での取材で場面ごとにカード化される	質問に促されるが、語りとしてはひとつとしてつながっている。
出所 (体験者)	取材者 (研究者) は、現場の状況について体験しており直感的理解ができることが多い。	協力者 (インタビューイ) が体験者であり、研究者はその実態については直接的体験がないことが多い。

である。逐語録も分類項目ごとに整理することは可能であると考えられる。しかし、どの研究分野においても HRAF のような分類の枠組みが存在しているわけではない。先行研究で分類に役立つ切り口があるのであれば、それを活用できるかもしれない。それもない場合のアプローチとして、半構造化インタビューなどの質問事項を分類の枠組みとしてとらえ、その質問とそれに対する答えの一覧表を作成し整理するのである。これが可能であれば、質問に対する答えはダイレクトに導きだされているかもしれない、その場合には KJ 法やその他の質的メソッドは使わずに、「答え」そのものが調査により発見されたこととして研究自体は成り立つかもしれない。しかし、多くの場合そのように単純に調査は終了しない。インタビューの「応え」は、インタビュアーからすると、必ずしも的確とはいえず脱線したり冗長だったり、場合によっては支離滅裂に思えるかもしれない。そのため、質問に対する答えを整理すること自体が難しく、計画とは異なり「失敗」とすることは珍しくはないであろうが、そのようになってしまうこと自体は不思議ではない。インタビュアーは学生のように教授されたことについて正確に理解し記憶し、質問に対し的確に応答しようとする存在ではないからである。大まかな方向性は知っていても具体的な質問内容は必ずしも知らず想定問答集は作らず、質問に対しそのとき頭に浮かんだ考えや気持ち、そして過去のことについても整理してではなく思い出されるままに語っていきがちである。筆者が指導している学生達が企業研究の際行うインタビューの質問は、概ね一問一答で完結するものであり、「入社してこれまで大変だったことは何ですか？」のような定番の質問であり、インタビュアーも学生相手に親切にわかるように簡潔に答えるのが

普通でありそこに調査の難しさはない。しかし、研究者が行う質問はそのような単純なことではなく、先行研究などを踏まえ解明されていない何事かについての調査である。

つまり、インタビューという名称は同じでも、その質は全く異なる。単純な取材インタビューが想定しているのは、質問に対して（適切な）答えが返ってくる Question/Answer [QA モデル] と言える。形式が QA モデルではないことを自覚せずにインタビューすることにより、インタビュアーは期待とは異なる回答に困惑してしまうのである。この場合インタビュアーが行うのは「回答」ではなく「反応」と捉え理解すべきではないだろうか。インタビューという名称ではあるが、何らかの反応を引き出すための刺激を与える行為、Stimulation/Response [SR モデル] という [QA モデル] とは異なるパラダイムが存在しているのである。立場が異なれば、インタビュー結果は [QA モデル] として理解しにくく [SR モデル] を解明するための別のアプローチを採用する、という観点を研究者が自覚することができる。その上で、[SR データ] を [QA データ] として、処理・整理するのである。[SR データ] であったとしても [QA データ] として処理が全くできないことはなく、ある程度の整理はできるはずである。脈絡不明に感じられるかもしれないが、少なくともインタビュアーは関係があるからそれを語っているのだと解釈し、事象の解明に役立つという立場でアプローチするのである。しかしそれでも研究者にとっては不明なことになってしまう場合があるだろう。その解明に役立つ「渾沌」をして語らしめる手法を採用する、という自覚をもって KJ 法に進むのが望ましいのではないだろうか（表 2）。（註 8）

質的研究においてはデータを良く読む（あ

表2. [QA モデル] と [SR モデル] の違い

	QA モデル	SR モデル
典型例	学生への理解度テスト	半構造化インタビュー
特徴	答えがピンポイントであるか否かで理解度を測ることができる。	質問に対する答えがピンポイントではなく周辺の事項、或いは関係ない事項を語っているように思われる。
対応	QA モデルでは、調査できない場合は、SR モデルを採用する。	QA モデルで枠組みを構成し分類する。それでも難しい場合には、枠組みを外して KJ 法のアプローチに切り替える。

るいは観察する) ことの重要性が様々な書籍やウェブなどによって強調されている。しかし、よく読むというだけではいわば精神論ともいえ、具体的な指示ではない。[SR データ] を [QA データ] として、慎重に処理・分類する過程は、この「よく読む」ことを実践していることになる。(註9)

III-2. 区切りと整理分類

逐語のどこで区切るかの適正度合が研究者にとっての難所となる。事例毎に異なるはずのそれを的確に説明しようとしたことが KJ 法発展の足枷になってしまっていた [永野 2019]。ここから先の具体的な進め方は、KJ 法の作業手順について書かれた書籍の正統なやり方とは異なる筆者のアイデアである。しかし、川喜田の意図を汲み、フィールドワークの取材を逐語録研究の実態に即し採用することは有益ではないかと考える。ただし誰もがこの方法を踏襲すべきと考えているわけではなく、時間の都合や発想の行き詰まりなどを踏まえ、慎重に試みるべきであると考えている。

川喜田は見聞した内容を、誰が見てもわかるように過不足なくひとつのこととしてデータ化(カード化)する。原則1枚のデータカードだが複数枚あってもかまわない。これが川喜田の「単位」である。つまり「単位」の長さには基準はない。インタビューデータは通常文字起こしされ、句読点がついているが実際

の語りにはない。それらは便宜的に作られたもので、本来は区切りがない。研究者自身、あるいは文字起こし担当者、あるいは、AI が勝手につけたものである。句点(「。」)がついていると、ひとつの文章がそこで終わったという解釈をしてしまいがちだが、センテンス毎にひとつのデータとして分けることは必ずしも適切とは言えないと考えられる。川喜田の研究対象はフィールドであり、そこには文章はなく、言語的な切れ目もない。しかし、どこかで一つのこととしてデータカード化はできる。インタビューであれば句点はなくとも、区切ってもよい箇所が多くの場合どこかに存在する。インタビューは [SR モデル] に従い、答え (Answer) は話していないかもしれないが、その周辺のことを語っているものである。それが Answer に感じられないのは、インタビュアーが的を得た Answer を期待しているためである。インタビューの際には感じられなかった区切りも、逐語録をインタビュアーの語り口を真似、その気持ちに沿って「よく読む」と区切られる箇所に出くわすはずである。それはセンテンスの途中であるかもしれないし、[QA モデル] で分割できるような綺麗なまとまりかもしれない。それが一つの単位となる。

III-3. 重複の場合

区切り部分の文章が、その前部分と後部分

で重複している（重複していないとそのままでは意味が通じない）場合はどうするか。その場合には、両方にそれを加えるようにする。HRAFでもそのように処理されるからである。川喜田のデータカードも分類記号は排他的ではなく重複があった。ひとつのデータであっても分類は複数包含されうる。あるデータに分類記号がA、B、Cの3種類あったでしょう。そこに付けられる記号はAのみでも、A、Bでも、A、Cでも、あるいはA、B、Cの組み合わせでもよかったのかもしれない。それが一つのまとまりであると（たまたま）調査者が認識しカードに収めることによって、ABCという記号がついたのである。それは「不適切」なデータであるかといえば、川喜田は「あらゆるデータはうそである」とし、我々は「事実などすることができない」が、そこには「多少とも真実の面影が宿っている」と語っている〔川喜田1986:70-71〕。こうしたことを考慮すると、一枚のデータ（あるいは「単位化」）の厳密性に固執しすぎることは必ずしも適切ではないと言える。むしろ、データの中で不必要なものはなく全てを使うという姿勢で臨むほうが、時間と労力という資源を有効に活用することにつながる。

Ⅲ-4. 長さの問題

逐語録を区切り単位化する上で、短く切るという誤り（というものがあるとしたら）が生じたらどうなるのか、という疑問があるかもしれない。しかし、文章のある個所で、区切り以降の箇所も全て使っていくとしたら、全体の脈絡の上である単位とある単位は、必然的に組み合わせになっていくものである〔永野2021a:56〕。それは、区切りを入れているときには気づかなかったが、区切り単位化することで、それぞれを「よく読む」ことがで

き、脈絡に気づいた、ということである。川喜田は、データカード自体は何枚になってもよいとしているが、そこに何が書かれているかを一目でわかるように「一行見出し」をつけた。この「一行見出し」が転じて、現在は「ラベル」（紙のラベルのことを意味しつつ、そこに記述される文章のこと。ラベルあるいは「元ラベル」とも表現する）を作ることになっている。「ひとつのラベルにははひとつの「志」をもつように」〔川喜田1997:20〕とあり、多くの作業者にとってわかったようではわからない基準となっている。一方、区切りがうまくつかず、長くなってしまう場合はどうであろうか。A4用紙で1枚以上ということもあるかもしれない。もし、それがつながっていると感じられるのであれば、極端であるかもしれないがそれを区切りとして採用すべきである。

Ⅲ-5. ラベルづくりと圧縮化

川喜田はデータカードの内容について「一行見出し」を付け、その一行見出しを紙切れに書いて、グループ編成を行った。図解化ではそれを模造紙などに貼り付けていくため、貼りやすいように裏面にシールを付けた「KJラベル」を考案する。そのラベルに記入することがラベルづくりと呼ばれる。元データでは情報量が膨大であったものが、それが圧縮されれば失われてしまう要素があると想定される。わざわざインタビューなどを行うのは、ある事象を明らかにするための詳細な事例を求めていたからである。研究者といえども、ある種の出来事について具体を含みながら端的に文章化するという訓練を普段からしていなければ、重要な要素を除くことなく短縮することは容易ではないであろう。短くすることが躊躇われる場合、あるいは、そのための労力が膨大になると想定される場合には、切

片化された元データを（元）ラベルとして採用してしまっただけが作業としては前進する。それが不都合ではないのは、KJ法の次のステップである「グループ編成」における「ラベル集め」では、あるラベルとあるラベルの同質性を「志」で判断するからである。単なる意味としての要約的内容でない。ことばで表現してしまうと失われてしまう性質があることを考慮し、言語で理解せず「心指し」や「情念」といったアプローチで把握しようとするのである。すると、既存の分析概念・専門用語では表現できない新しい発想が見えてくる。

川喜田がKJ法を発想したのは、元々、奈良の都介野村（ツゲノムラ）の研究である。その時には図書カードを利用したデータカードを広げて検討した。大きな机の上で広げられる程度の分量で処理しやすかったのである[川喜田1993:234]。「ラベル集め」と呼ばれている工程は、必ず事前にデータを圧縮しておかなければできないという訳ではない。扱うデータ数が1000にもなったらデータカードを一度に広げることができないので、小さな紙切れに「一行見出し」を書き処理をする必然性がある。しかし、川喜田はその「一行見出し」に書かれた文言そのものではなく、そこから想起される事象そのものを「志」と呼んでいたのである。

Ⅲ-6. 自分語と他人語

川喜田は、「一行見出し」について元々「自分語」「他人語」という表現で、他人に見せなければ自分がわかればどのような表現でもよい、としていた。「自分にだけの確にわかればよい」のである[川喜田1970:53]。誰かに見せるか見せないかで、作業工程は変わる。川喜田のフィールドワークのように取材者が現場に行き簡易的に的確に記述すること

と、他者が経験したことの語りを的確に短縮化することは同列にはできないであろう。圧縮化（あるいはラベルづくり）のプロセスで手間取ってしまうのであれば「自分語」も「他人語」も創作しないことはオルタナティブとして有効であると考えられる。

研究発表などで元ラベルを示す必要がある場合には、図解化・叙述化などすべての工程が終わった上で、適切な元ラベルを創出すればよい[川喜田1970:53]。その時には全体理解がなされているので比較的どのように元ラベルとして圧縮すればよいか見当をつけやすい。また、すべての元データを、ラベル化つまり圧縮する必要もない。必要な部分についてのみ行っても構わない。具体的な事例として示す場合には、元データ、つまり逐語の一部をそのまま引用した方が、理解されやすい説明になることも考えられる。

以上、まとめとしては次のようになる。

- ・[QAモデル]ではなく[SRモデル]でデータにアプローチし、その上で整理に取り組む。
- ・インタビューの区切り（切片化）にこだわりすぎず、原則すべて使い、重複は構わない。
- ・単位化として圧縮した「元ラベル」は作らなくてもかまわない。

Ⅳ. 研究における課題と今後の方向性

研究の目的は、特定のメソッドに従ってデータを処理することではなく、これまで知られていなかった何事かを解明することにある。本論では“隘路”と思われる箇所をスキップし、次のステージへ進むことを提案し、研究活動に資するよう期待している。一方、KJ法を進める際には、正規の手順にしたがっ

て進めていくと、不思議なことに新しい発見があることが共同研究から判明している [永野 2021b]。地道に少しずつ理解をしていくことに研究としての喜びや楽しみが見出されることも筆者は理解している。

研究者にとって不明な状況が、自らの力で明確にされていく充実さが体験されることは何ものにも替え難い。それを目指し、本提案のように新しい地平に行くことを優先させることもオルタナティブの一つとして有益ではないだろうか。同時に、難所を常にスキップするのではなく難所にもトライし、自力をつけていくという在り方の意義についても、今後検討し論じていきたいと考える。

註

1. KJ法の研修などを行っていた株式会社川喜田研究所で研究員（指導員）をしていた山浦は、著書「質的統合法入門」で、インタビューを逐語録化した素材を使つての質的統合法（KJに類似した手続き）を紹介している。[山浦 2012]
2. 一般的なインタビューはなく、ナラティブという語りとして諸学問からやや異なったアプローチで精査する手法もあるが、本論ではナラティブという視点については論じない。
3. 単位化は、区切ること（切片化）、それを一定の分量に納めること（圧縮化）の二つから成り立っている。フィールドワークであれば時間と空間がつながっている中でのある場面を一つとして切り取る。インタビューデータもどこかで区切り、通常は、そのデータ量（文字数）を減らす工程になる。
4. 図4はKJ法を使いインタビューデータを処理した論文において、執筆者 [大矢 2017] が掲載したKJ法の手順図である。原本は川喜田研究所 [1997] のテキストに掲載された図である。「ラベルづくり」よりも前にそこで素材となっているのは取材であり、具体的な分野として「フィールドワーク」「記録類から抜粋」「討論」「その他」の4つであり、「インタビュー逐語録」は含まれていない。
5. HRAFの分類は排他的でなく、分類項目の重複

も構わない。データ整理のため川喜田はそれを自分用にカスタマイズして使っていた。

6. M-GTAの解説の中で、人間力の重要性が強調されている。こうした力の中には、想像力も含まれていると考えられる。[木下 2003]
7. 表札づくりは、KJ法の手順の中でも最もむずかしい作業とされている [川喜田 1986:126]
8. 川喜田は取材には求めることが明確な「探索」と、求めるが曖昧な「探検」という二種類あると指摘している。前者が [QA] モデル、後者は [SR] モデルに該当している。[川喜田 1967:32-33]
9. KJ法にはデータを慎重に分類する「探検型花火」や重要性を吟味する「多段ピックアップ」などもあり、これらもよく読むことにつながっている。[川喜田 1986 など]

文献目録

大矢英世

2017「男子進学校生徒の家庭科観 男子進学校卒業生へのインタビューデータの分析を通じて」『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科第23号』

川喜田二郎

1964『パーティー学』（1996『川喜田二郎著作集 7巻 組織開発論』、中央公論社）

1967（1976. 40版まえがき追加, 1984. あとがき追加, 2017. 改訂版. 1984版と同じ内容

1970（1981. 30版まえがき追加）『続・発想法 KJ法の展開と応用』、中央公論社（中公新書210）

1986『川喜田二郎著作集第5巻 KJ法 渾沌をして語らしめる』中央公論社

1993『創造と伝統』祥伝社

川喜田研究所

1997『KJ法入門コーステキスト4.0』

木下康仁

2003『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い』弘文堂

永野篤

2017「KJ法の視座からアクティブ・ラーニングを考察する」『聖和学園短期大学紀要第54』

2019「伝達における非対称性の省察－KJ法の「マニュアル」の変遷を材料として－」『聖和学園短期大学紀要第56』

2020a「フィールドワークと叙述の関係性をKJ法・W型問題解決モデルを通して理解する」

『聖和学園短期大学紀要第57』

2020b 「介護福祉士養成課程を通して得た学生の
学び」『聖和学園短期大学紀要第57』阿部和
宏共著

2021 「KJ法による「語り」の再構成のメカニズ
ムの探求－質的研究における存在の意義－」

『聖和学園短期大学紀要第58』

山浦晴男

2012 「質的統合法入門 考え方と手順」医学書
院